

「永遠の命にあずかるように」

使徒行伝

13章43節～14章7節

説教

本庄侑子牧師

教会が2000年間、変わることなく伝えてきたのはイエス・キリストの福音です。福音とは、罪の赦しと永遠の命の約束。永遠の命とは、いつまでも死なない命のことではありません。イエス・キリストの十字架の死と復活によって、過去、現在、未来、死を超えてまでも、時を費やして、神様との関係の中に結び合わされてしまった命。人生のどの瞬間も、神様と無関係とは言えなくなってしまった命のことです。

洗礼を受けるということは、その永遠の命を受け取るということです。洗礼において、古い自分に死に、新しい自分に生まれさせられます。しかしそれは、これまでの自分と切り離された自分になるものではありません。これまでの人生を背負ったままの自分が、キリストに在る全く新しい命をいただいて、神様に喜ばれ、用いられる人生となる、その約束に生き始めるのです。

教会が誕生し、福音がエルサレムから宣べ伝えられ始めた時、各地で主イエスを自分の救い主と信じて洗礼を受けた人たちが現れた一方、敵意を抱かれ、ついには追い出されてしまい、働きが頓挫して終わったことも多くありました。

今日の聖書箇所においても、福音を聞いて喜び、受け入れた人たちがいた一方、妬みにより背を向けた人たちがいました。福音が前進するところでは、様々な人間の心の動きも起こり、前進を阻んでくるのです。しかしそんな中、パウロとバルナバを満たしていたのは「喜びと聖霊」(13章52節)でした。

次の町でも、彼らに対して悪意を抱かせた人たちがいました。「それにもかかわらず、2人は長い期間をそこで過ごして、大胆に主のことを語った。」(14章3節)元の言葉では、「それにも関わらず」は「だから」です。自分たちに悪意を抱く人たちがいる。実りが無い。「だから」彼らはとどまって主のことを語り続けました。

彼らはその町からも追い出されました。しかし、のがれた先で、引き続き福音を伝えました。労苦の実りがなくとも、喜びと聖霊に満たされて、主のことを語り続けたのです。

教会は始まりから、全てが順調ではありませんでした。福音の前進を妨げる力の中を歩んできました。永遠の命にあってはもう抱かなくてもよい思い、過去への罪責感や、実りの見えない日々の営みへの虚しさ、将来への不安などによって、自分で自分から福音を追い出してしま

うこともあります。しかしそれでも、喜びと聖霊が教会を満たし、立たせ続けてきました。私は洗礼を受けた。過去も現在も将来も、時を費やして、神様の栄光があらわされるための命にもう生き始めている。教会は、そんな恵みの事実の立ち返らされ、それを証しするための力を与えられて、歩み続けてきたのです。

「永遠の命にあずかるように定められていた者は、みな信じた。」(13章48節)これは、誰が永遠の命にあずかり、誰がそうでないかを、神様が最初から決めておられる、と伝えたいものではありません。あなたが今、礼拝に身を置いているということ、信仰に導かれ、洗礼を受けたということ。それらは、あなたの思いに先んじて、神様があなたを選んでくださった、ということ。私たちは、そんな神様の選びに安んじて、自分自身を委ねてよいのです。

私たちは他の人たちのことが気になります。かつてペトロも「主よ、この人はどうなるのですか。」と言いました。しかし、主は言われました。この人を私がどうするか、あなたに何の関係があるか。あなたは私に従いなさい、と。

主が他の人をどうされるかは、私たちが推し量ることではなく神様の領域です。確かなことは、神様は全ての者たちのためにイエス様を十字架につけ、よみがえらせてくださったということ。それを信じる信仰をまずあなたに与えて、福音を前進させるために、他の誰かではなく、あなたの人生を用いたいと願っておられるということです。だから今日、あなたはここにいるのです。自分自身と自分の人生を、十字架と復活の主から大切に受け取って、今日ここから、心を込めて、主に向かって生きればよいのです。

パウロとバルナバは、主の業に励む中で、何度も思いがくじかれました。しかし、それらを全て主に委ねて、喜び溢れて主に向かって働き続けました。永遠の命にあっては、私たち自身もその働きも、決して無駄にはならず、神様が必ず受け取ってくださり、終わりの日に完成されるご計画の中で用いてくださるからです。働きの結果や人の反応に一喜一憂しなくてよいのです。神様が受け取ってくださる。もうそれで十分だからです。神様の願いはただ一つ。まずあなたが、永遠の命にあずかることなのです。

(記 説教要約奉仕者)